The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	永根伍石について
Author(s)	井上, 翠
Citation	懐徳. 1953, 24, p. 55-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90264
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

永根伍石について

井上翠

六年成り本朝列聖の御書及び縉紳緇流の五六百年代より一千年代に及ぶ間の書名ありし人々の筆跡を蒐錄せるものにして、其の上梓に關しては叔父高橋玉川の資を捐てて之を慫慂し、以て贊襄を全うしたるものなり。大清三朝事略は寛政十一年刊す。德川時代唯一の清朝史なり。この書元來永根伍石、邨山芝塢の合著にして、二氏が三朝實錄二百十八卷を剪截し、元明史略に續け、十八史略と連絡して支那史を通串せしめたるものなり。

以上は龜田學士（名次郎、兵庫縣印南郡曾根村の人、大阪外國語學校教授）が私の爲に特に記錄して贈られたるものである。この大清三朝事略と云ふは清三朝實錄採要（太祖二卷、太宗八卷、世祖六卷計十六卷八册）を抄略して一册と成せるもので、採要八册は當時長崎に舶載せる清朝祕府の記錄たる三朝實錄二百十八卷を撮要せるものである。此の三朝實錄採要は邨山緯、永根鉉共著となれるも、實は永根鉉卽ち伍石の手に成れるは人の皆認むる所である。其の不朽の名著たることは內藤湖南博士著

(1) 永根伍石傳

永根伍石は初め北條氷齋と云ふ。後姓を永根と改む。明和二年乙酉二月八日東奥盛岡に生る。諱は鉉、字は元鼎、伍石と號す。一に無佛稱尊といふ。通稱勇八郎、江戸下谷仲御徒町に住す。初め叔父高橋玉川に從ひて句讀を受け、後江戸に出でて自ら學びたるものの如し。玉川は名を元吉、字を文中と稱し、京師に遊び、和歌を香川黃中に學び、大典禪師等と交り、後江戸に住し俠儒を以て知られたる人なり。伍石は儒學に秀で、書篆刻に巧にて好古の癖あり。桂川國瑞と親交あり。當時關西の名大夫と稱せられし姫路藩老河合寸翁とも交誼を結びしが如し。觀濤處の跋文及び寸翁主壽像の題文其一斑を察するに足る。天保九年戊戌七月二十日江戸に歿す。享年七十四。芝金地院に葬る。著書若干あり。就中集古墨帖・大清三朝事略最も著はる。二書共に北條姓を稱せし時の作なり。集古墨帖は寛政

の清相史通論中に稱讃してあり、東洋史大辭典にも詳說せられてある。此の書は萬延年間清鑑易知錄と改名して大阪にて出版せるものがあるが、內容は清三朝實錄採要と全然同一である。大清三朝事略は更に之を抄略して一卷に纏めたものである。是等の典籍は清朝史の研究に缺く可からざる名著であるが、肝腎の永根伍石に關しては人名辭典は勿論、いづれの書籍にも記錄が無いのは如何なる理由であるか。東京都芝公園金地院の永根伍石碑文には單に「諱は鉉、字は元鼎、伍石と號す、永根氏明和二年乙酉二月八日東奥盛岡に生れ、天保九年戊戌七月廿日江戸に歿す、享年七十四、其の生系父母は詳かに家牒に具せり、操行及び著述は蓋し之を知る者あり、今敢て墓碣に勒せざるは、敬んで生前の遺命に遵ふなり、」と記したるのみである。是に由りても伍石が如何に名利に恬淡で不言實行の人であることがわかる。人名辭書などに其の傳記が載つてないのも却つて伍石の本懷であつたかも知れないと首肯される。叔父高橋玉川は姓は平氏、小田原北條氏の一族である。小田原城陷り高祖某は母家の姓高橋氏を冒して南部に逃れ、南部候に仕へて世臣となる。東都に客游して儒俠を以て聞ゆ、と集古帖跋文に書いてある。伍石が北條姓を名乘れるはこれにより略承出來るが、永根姓を冒せるはどう云ふ次第であるか、其の家牒を一見すれば分明するのである。

伍石が三朝實錄採要と集古帖刊行に要せる資金は莫大のものであると思はる。これを工面調達し運轉するには尋常一樣の苦心でない。而も完全に所期の目的を達成せる伍石の經濟的手腕は之を認めざるを得ず、この學殖と識見と手腕とは果然寸翁大夫の慧眼に觸れ、寸翁の幕僚となり顧問となり姫路藩政革新の機務に參與せるものである（當時姫路藩の財政は疲弊混亂の極に達し家老河合寸翁が柱石となつて復興に苦心した。伍石は之に協力して漸く復興を得たのである。伍石の豆州行加賀行は之に關聯せる要務を帶び出張せるものと思はる。）。

(2) 寸翁と伍石

寸翁と伍石兩者の關係は何時の頃よりどうして發生したものか不明である。伍石は江戸及び京阪の學者間には交游頗る廣く、就中柴野栗山とは特に親交深かりしことは三朝實錄採要の序文を栗山が書いて居る。なほ栗山文集には伍石小廬山銘の一文あり元鼎賢友の爲にすと題し、萬層峯千尺泉、下無地上惟天、與之伍誰也鉉、蝶乎蟄日盤穿、騎雲背踏風肩、肉雖溫骨已僊、韻而歌我是彥と、これを觀てもその親交の程度が十分に窺はれる。親友としての其の性格を知り拔いて居るから肉は溫かなれども骨は已に仙すと云ふ名句が出るのである。伍石は老後その配偶を失ひてより益俗事を厭ふやうになつたので家事

一切は文峯夫妻が代行し自らは悠々自適の生活に入つたものである。

加藤善庵柳橋詩話にこの小廬山銘を引いて末に噫先生（栗山）は墓木已に拱す、而して我が伍石老人は鮎背兒齒仍は文墨の間に逍遙す、栗山豈に豫め華封の祝を兆するかとあり、小廬山と云ふは、伍石は石を愛好して數多く蒐集し翫賞せるが、此の石は廬山の形に似たるより小廬山と名づけ特に愛翫したのである。なほ栗山文集には伍石に關係ある文が二三見えて居る。面白いのは、河合大夫が自分の名は鼎と云ふが、これは好くないから改名しやうと思ふが如何と栗山に相談を持ち込まれた、栗山は、貴臺は姫路藩の名大夫である、藩政を掌握し、樞要なる地位に居られるから鼎で少しも不都合は無い、と云ふことを易經の辭を引用して理致井然と說得された一文がある。栗山と寸翁との關係は、私は寡聞にして唯だ此の文と漢硯銘以外に聞知する所が無いのであるが、寸翁を栗山に紹介せるは伍石では無いかと思はれる。更に伍石を寸翁に紹介せる者は誰であつたか全然見當がつかない。林祭酒と寸翁との關係もあるから、林祭酒が栗山を、栗山が伍石を紹介したものとも見られるのである。此の林祭酒、栗山、寸翁三者の關係は更めて研究する必要がある。兎に角寸翁と伍石との間は尋常一樣のもので無かつたことは、寸翁が伍石に送れる書簡を一見しても分明であるし、寸翁が伍石の息永根文峯を姫路藩の儒臣に取り立て、その高足渡部劣齋を好古堂書學館最初の教授として取り立てたこと、文峯の遺筆觀濤處の三大字を加茂山の山崖に刻するに盡力したる等にてもよく窺はれるのである。寸翁と伍石の關係を知るには家藏の寸翁書簡を見れば一目瞭然たるものがあるので下に之を抄出する。

春光易移感銘不少候愈御安祥奉壽候此間は度々御懇諭恐縮申上候先以觀瀾の五大字驚斗感倒仕候それに付不覺老淚深察入候扨此五大字此度の豆州行よき境を見立海岸に刻し候ハバ一大觀とも存候如何如何豆州行の事は近日其筋より爲申達候いづれ拜話の節申上候扨又加藩の謝物如何敷兩品差遣試候これにてよろしと思召候はゞ上書を被下候て差出暮々宜敷謝辭御述相願候茶碗は姫路にて安南を寫しにて候則東山の字有之候何分宜御取扱相願候拙詩は思召次第に致候彼老人（老人トハ加藩家老、姓氏不明）全詩人の高猶と相見え候故（三字不明）まし作など氣に入申聞敷候却てそしりを引事にて候へ共毀譽もとより度外に致候故全く老先生思召次第に任せ候呵々玉郡橋圖扨々面白くこれは直に司立可申と大幸候明日は林祭酒光來明日より巢鴨に罷出候（酒井侯邸ハ巢鴨ニ在リ）一兩日終日夜迄懸り申べく候間御出ハ必差合可有之候

早々頓首　三月廿五

此兩種如何しく不腆に存候も此度豆州行之御送別に聊具呈仕候御手當の事ハ念入に談置定て例吝有司尚申承申上候

伍石先生　青照　河合升拜具

是に由りても兩者の關係が如何に親密なりしかを察知すると同時に、寸翁の立てた功業の裏面には伍石の如き學殖識見共に豐富なる學者の存在を見逃してはならぬ。そして犧牲心に富める伍石の高潔なる人格が益追慕せらるゝのである。

(3) 集古帖

集古帖は正續全部八卷より成る。第一卷より第五卷までが正篇で、あとの三卷は續篇である。其の第一卷の冒頭は醍醐天皇御筆筥崎八幡宮樓門の額字敵國降伏の四大字を縮寫して揭載せるに始まり、孝謙天皇御筆唐招提寺樓門の扁額四大字、次ハ嵯峨天皇御筆、後宇多天皇御筆、光明皇后御筆、舍人親王書、惠美押勝書及び天皇御璽を載せ、最後に大日本寛政五年冬十月摹勒上石と自署してある。全篇に亙る說明書はすべて伍石の自筆である。第二卷も同年同月の上石で釋空海書尺牘三通を揭ぐ。これは京都東寺の秘藏を屋代弘賢が鈎摹印刻して高橋玉川に贈つたもの、次に空海書啓一首、崔氏座右銘、贈東山廣知禪師十喩詩跋尾が載せてある。第三卷は寛政六年春正月の上石で逸勢、道眞、佐理、行成の書を、第四卷は寛政六年夏六月の上石で小野道風の書を輯めたるもの。第五卷も同年同月の上石で法隆寺金堂藥師像光背記、兎道橋斷碑、元明天皇陵墓碑、多賀城碑、藤原敏行書、興福寺南圓堂銅燈臺銘、以上。これで正篇五卷は完成を告げた。卷尾に玉川の跋文がある。それに由ると伍石は嘗て瘞鶴銘一本を手に入れ、之を摹寫し、工人井上慶壽をして鐫刻せしめしに頗る精巧なり、玉川之に告げて曰く、漢人の墨帖舶來するもの歳に多し、其の善なるものも入手難からず、我國には古來藤原道長、源從英、僧永仲中巽等の如き漢人の書冊に名を留めし人あるに拘はらず、是等の書は我國には傳はらず、豈に一大恨事にあらずや、今彼の國舶來の墨帖を飜刻するよりも、我は我國古來傳へ來りし本朝人の墨蹟を刻するに如かずと、乃ち自ら蒐めて所藏せるものを悉く出して之を與へたり云云、と述べて居る。之を以て察するに伍石は瘞鶴銘を手初めに普ねく漢人の墨帖を飜刻する意志にて、既に其の稿本の蒐集に取りかかつたが、玉川の勸言により飜然本朝集古に着手したのである。私の所藏する伍石摹寫の草雲閣帖、釋迦如來成道記、重修吳相伍大夫廟記、明代法書第九、洛神十三行、印藪序等、雙鈎本には東方先生畫贊并

序、孔子廟後碑、孔廟禮器碑、禮器碑陰幷兩側等があるが、是等はいづれも其當時苦心作成せる稿本であらう。

集古續帖第一卷は、釋空海、小野道風、藤原行成、藤原佐理の書を收めてある。伍石の跋文によれば第一卷の此の三通は浪華木村蓁莪堂の秘藏せるもので、それを伍石に託して印刻したものである。其の跋文の大略に曰く、甲寅の秋叔父玉川翁（玉川ハ高橋玉川）家刻集古帖を世肅に贈る、世肅乃ち右三通を送られ書を致して云ふ、僕嘗て古の名書の湮沒するを慨き、廣く索めて上石せんとし、一二を摹藏せり、奈何せん近世荐りに家難に罹り、宿志索然たり、今叔姪の此の擧は先づ吾が心に合致せり、若し僕の贈る所の者を以て後日印出するを得ば吾が志も亦た空しからずと、鉉大師の書を觀るに字字飛動す、東寺所藏の尺牘とはまた別に一格を成すものなり、少內記及び大納言の書は圓靜遒美一點の矜氣なし、玉川翁此の拱璧を得て余をして更に集古續帖を撰せしむ。嗚呼世肅其の藏を吝まず、我に惠投して集古の美を贊襄す、好古にして弘濟するものと云ふべし、海內好古の士をして此の勇氣あらしかば庶幾くは名跡の隱れたるもの皆之を公にして不朽に傳ふべし、云々とあり、次に大典禪師の跋、皆川祺園の跋を載せたり。此の第一卷は寛政七年春三月上石せるものである。

續帖卷第二には、醐醍天皇御筆、釋光定戒疏闕本、釋迦像光背記、藤原道長書、釋士曇書、釋中津書を載す。寛政七年冬十月の上石に係る。

續帖卷第三には弘法大師書を收めてある。寛政七年冬十月の上石に係る。

かくして伍石が苦心慘憺集大成せる集古帖八卷は、伍石歿後板木の所在も不明となり、墨帖も發行部數少かりし故か世に傳はるもの僅少で入手困難であつたが、津藩山崎義故之を慨し、百方搜索の結果漸く一本を購得し、之を翻刻して文政四年に出版して居る。これも其の部數に限あれば今日では中々得難き珍書となつて居る。この墨帖は我國古來の書學の發達がその最高峯に達し、之を中華の昔に比べても遜色なく、完全に當時我國文化の特色を表現したものである。清三朝實錄採要は當時清國にても此の種の典籍が無かりし故、我國に渡來せる清國人は伍石の此の書を購入して歸國したと傳へられて居る。此の二大著を完遂せる伍石の偉大なる功業は永久不滅なるに拘はらず、伍石の名は全く湮沒し其子孫も存在不明であるとは、天道果して是か非か、眞に慨嘆に堪へないのである。

附記　三朝實錄採要、清鑑易知錄ハ姫路ニテ兵火ノタメ燒失、集古帖トソノ原稿ノ一部ハ保存シアリ、三朝實錄ト易知錄トハ先年內藤博士講習ノ時參考資料トシテ陳列サレタト承ル。